

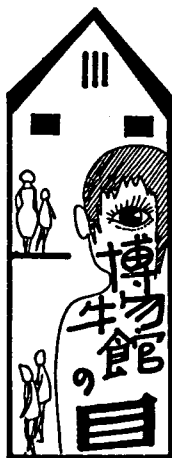
No. 67

1985.

1. 10

# 岐阜の博物館

編集兼発行  
〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL(05752) 8-3111(代)  
振替 名古屋 6 37909



## 全国大会に参加して思うこと

第32回全国博物館大会は、去る昭和59年10月3～4日と、岩手県盛岡市で開催された。大会テーマ「教育改革と博物館 ～今後の方向と在り方について、如何に考えるべきか～」のもとに、シンポジウム、分科会がもたれた。シンポジウムでは「博物館での教育効果の検証法は」「自ら参加し、観察し、発見する喜びの場としての展示は」「展示と映像をどうドッキングさせるか」「地域文化の核としての特色ある博物館づくりは」「学問研究と教育普及のドッキングは」等々の課題が提出されたものの、それに対する具体策、具体的実践例の交流等は乏しく、参加者が、大会テーマ及びその主旨説明から期待していたことを充分満足させるものとはいえなかった。学校団体が大半して来館する事例での展示室学習の問題点、逆に、学校団体利用をどうふやしたらいいのか、ボランティア活用のこと、美術系館園の催物の頭打ち状態、公立博物館の売店のあり方、公立館園への寄付

と税金の問題、等々、シンポジウムで話し合われた多くのことは、今に始まったことではなく、幾度も幾度も語られ、話題提供されてきたことで、正直云って新鮮味に乏しく、大上段に振りかぶった「教育改革と博物館」にとっては、物足りなく感じられた。

年に一度の全国大会の性格からしても、多くは望めないとしても、急変する現代社会にあっては、大会テーマ主旨にもあったように、博物館の現実、施設、設備、資料、人、活動の面で、他の社会教育施設等と比べれば、本質的な面で改善・充実しなければならない課題が山積しているはずである。現状の徹底的な分析調査、問題点の明確化、そうした焦点化された討議、実践の交流、さらには大会研修内容の体系的集積をめざした方向へ、全国の博物館実践人が結集する大会、いわば博物館の最前線で悪戦苦闘している学芸員集団の全国大会を目指してもらいたいものである。(S.O)

## 合掌造り生活資料館

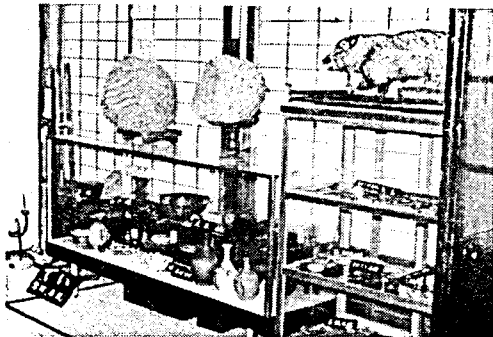
▽ 501-56 大野郡白川村荻町  
TEL 05769-6-1435  
夜間 6-1037



(生活資料館の全景)

白川郷の合掌家屋は、あまりにも有名で、多くの人が訪れます。しかし、白川郷の歴史、自然風土、民俗習慣等を伝える文献も少ないために、残されている資料を数多く収集・保管し、白川郷を研究し、より正しく理解していただく方々の一助になればと、昭和52年に開館したものです。館全体は、明治初年頃の生活様式を保存するように配慮され、二階では、合掌構造がよくわかるように、各部の名称がつけられています。石臼では粉を引いてみることができ、わら打機ではわらを打ち縄をない、ぞうりづくり、むしろ織りの実演もできるようになっています。夏には蚕が飼われています。いろりでは、年中火が焚かれており、訪れた人と館主とが、話し

(での間の展示)



(道端、庭先からも資料が見学できます)

合える場が設定してあります。合掌家屋の間取りをひとつひとつ見て廻って読みとるとともに、展示されている数々の民具、家具から、白川郷の人々の生活のようす、厳しい自然の中で生き抜いてきた人々の生活の知恵を学びとって欲しいものです。

建物自体が、ひとつの貴重な博物館資料であり文化財であるだけに、その館内にある生活用具ひとつひとつは、ここにあるからこそ血と汗のにじんだ使いふるされた中に“生命”を得て生かされた展示になり得るはずで、そのことからすると、展示資料全体を、今一步体系的に整理し直し、一度にあれもこれも出してしまうので、精選されたらどうだろうか。収蔵庫を別に設けて、貴重な資料を分類・整理・保管し、合掌家屋の中の展示には、ゆとりとストーリー性を持たせると、いっそう充実した生活資料館に発展できるものと期待されます。10月14～15日のどぶろく祭は休館、冬期間は、積雪状況等により臨時休館もありますが、年中無休です。岐阜方面から白川郷へ向かうと、合掌集落にとりつく最初、国道左手にあります。有料。

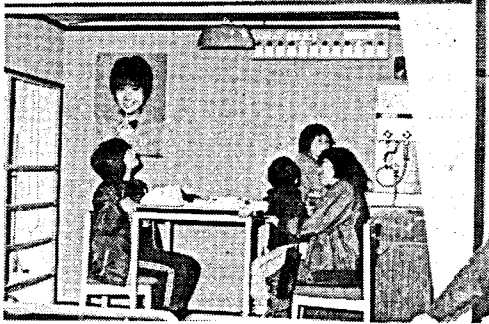
(奥座敷の展示)



## 岐阜県広域防災センター

〒483 羽島郡川島町小網町小林寺2151

TEL 058689-4192

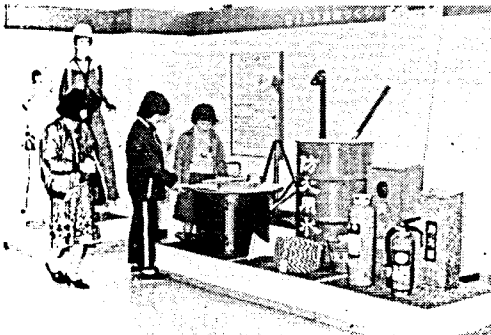


(震度7まで体験できる地震体験装置)

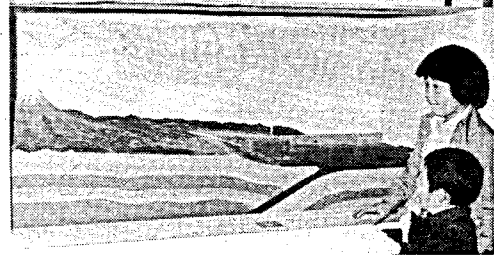
岐阜県広域防災センターは、災害発生時には、資機材や物資を緊急輸送するための拠点となり、隣接する県消防学校グラウンド（ヘリポート）から、ヘリコプターで災害地へ輸送します。また日常の防災知識の普及活動として、センター1・2階に展示室、3階に訓練実習室、視聴覚室を設け、無料で公開、利用を呼びかけています。

展示内容は、地震体験装置（実際に震度をいろいろ変えて、ゆれぐあい体験できます。）、東海地震のメカニク等の地震関係、大雨・大雪・台風等の気象関係、自主防災を呼びかけた防災クイズ、家庭のそなえ自己採点、ビル火災と避難、火災通報と初期消火等の防災関係があり、実物資料、動く模型、ビデオ等を使って楽しく学べるように配慮されています。家族連れで、一度はじっくり見学したいものです。

(防火道具類の展示と自主防災組織づくりの呼びかけ)



## 東海地震のメカニク



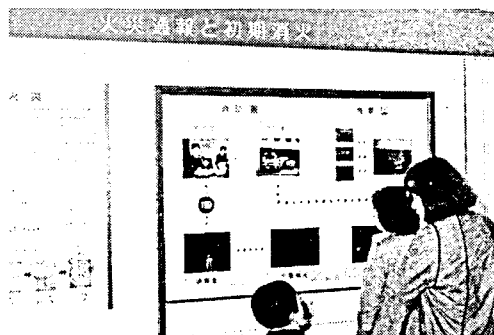
(ボタンを押すと動く模型もあります。)

視聴覚設備や訓練実習は、地域ぐるみでの自主防災組織づくりに役立てていただくためのものです。骨折時の応急手当、人工呼吸や心臓マッサージのやり方の実習、消火器やバケツリレーによる初期消火のやり方訓練、防災映画・スライド、ビデオ等の視聴覚教材の鑑賞見学と、幅の広い学習・訓練が可能です。町内会での研修など、団体での活用が望まれます。団体利用に際しては、事前に打合わせに出かけ、職員の方と訓練内容・学習内容等について十分相談し、実りの多い防災学習会にしてほしいものです。

入館、団体訓練実習ともに無料です。開館日は、月曜日～土曜日の午前9時から午後4時30分まで（土曜日は正午まで）です。ただし、祝日、振替休日、年末年始（12/28～1/4）は休館です。

火災は起ってしまったからではどうにもなりません。地震も、日頃からの心構えが十分できていれば、被害を最少限にいとめることができます。防災は他人まかせではなく、私たちひとりひとりの心の中に、しっかりと根づかせておくものです。

(初期消火のしくみがカラーコルトンで)



## 学芸職員研修会の提案

岐阜県博物館協会理事長  
内藤記念くすり博物館長

青木 允夫

旧制中学4年の昭和19年3月、名和昆虫博物館を訪れたのが私の最初の博物館見学であった。それから26年、同じ岐阜県に「くすり」の博物館を創設するため、病院勤務を退職しこの地に移住してきたのも何かの縁であろう。

博物館づくりと言っても、建物が出来ていただけで資料は何一つなかった。その上、博物館に関する知識も何一つ持っておらず、熟年の厚顔と人一倍旺盛なやじ馬根性で当たるしかなかった。

一年間日本中飛び回って、資料の収集活動を行なった。幸いにも薬の博物館は皆無であったこともあり、数千点の資料が旧家などから集まった。

一年後の昭和46年6月、表面は華々しく、内心はビクビクでオープンした。展示は地元の看板業者に依頼し、いわゆる専門業者は参加していない。(専門の展示業者の存在さえ知らなかった。)

オープンして一息ついたところで考えた。これで古道具屋のオヤジと変わらない。いやそれ以下である。ガラクタと資料はどう違うのだろうか。古道具屋、見世物小屋と博物館はどう違うのであろうと……。

そこで、博物館についての専門書をむさぼり読み、全国の博物館見学に駆け回り、博物館協会に入会し、その研修会に出席し、学芸員の資格を取るなど、自分なりに努力したつもりである。2、3年がまたたく間に過ぎた。

収集、保存、展示、研究などを使命とするのは、もちろん、とても一人の力ではより多くのものは望めない。充実させるためにはと、学芸員を採用することにした。採用した学芸員が辛いことに優秀で期待にこたえてくれた。更にもう一人、と三人の学芸員で連日ガヤガヤ議論し合った。博物館だよりの刊行、更には外国か

ら資料を借りて来ての特別展をやろう等々……、次から次へとアイデアが飛び出した。東京にある当財団の事務局が財政面で積極的に協力してくれたおかげもあって、ほとんどすべてが充実した。

考えてから走るのではなく、走りながら考えるといった小集団であるが、時には大休止も反省することもある。井の中の蛙がカラオケに合わせて歌いまくり、自己陶醉に陥っているのではないだろうか。果たして来館者のニーズに答える博物館を目指しているだろうか。その反省にたって新館を建設し、ここを展示場として昭和61年再出発することになっている。

博物館人に身を転じ14年、私の経験から次のことを提案したい。

それは学芸職員の研修集団の発足である。その必要性は今更申すまでもないが、愛知県博や静岡県博などでは活発に行なわれている。昨年愛知県の研修会に参加させていただいたが、30余人の一泊2日にわたる学芸職員の討論は熱っぽく充実したものであった。若い学芸職員と、多くの経験を蓄積した先輩職員との交流は、すばらしく有益な研修会であった。

学芸職員……。若い人たちの向学心と、その道一筋に研さんしてきた熟年者の豊富な知識、それをうまくかみ合わせてゆく組織を作りたい。

この研修集会は、卒後研修としての役目を果たすであろうし、更に充実した博物館運営の糧になり、ひいては生涯教育の場の一つである博物館が確固たる地位を築いてゆくことに役立つであろう。

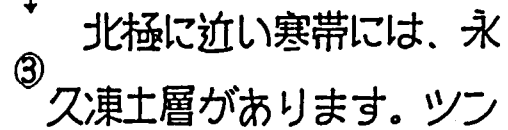
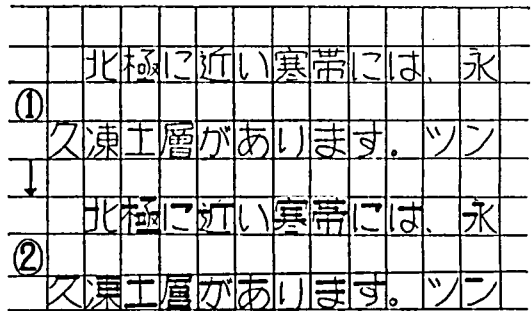
学芸職員は極めて高度の専門職である。片手間仕事では脱落する。県下の学芸職員それぞれが教え合い、学び合い、社会的責任を十分に果たすようにしたいものである。

## ラベル・解説パネル等の文字書きについて

岐阜県博物館 学芸員 小野木 三郎

展示資料の名称だけを記した小さな展示ラベルから、60cm×90cmといった展示コーナー全体の解説パネル、あるいはその他種々雑多な展示パネル類にいたるまで、博物館の展示諸活動の中では、手づくりで自作しなければならないことが多々あります。全てを外注できれば、本職の看板屋さんが美しく整ったすばらしいものに仕上げられますが、職員の手づくりにも、それなりの暖か味があって親しみを持っていただける強味もあります。ところが、あちこちの展示場で、マジックインクで流し書き、走り書きされたようなラベルや解説文にお目にかかることがあります。見て下さる方々に、気持ちよく読んでいただくためには、字の上手・下手は問題ではなくて、いかにていねいに、読みやすくと気を配って仕上げているのか、書き手の心構えにあると思います。私の実践事例をご報告し、少しでも参考になればと思います。

人間の目は、左右に直線上についています。最少限横線は定規で引くこと、一行おきに文字を書くこと、この二点を厳守するのが基本です。上図を参考に、手順を説明します。①書く文字の大きさに従い、鉛筆でうすく方眼をしきりま



す。方眼の一行おきに、鉛筆でうすく文を書きます。②字の大きさに合った油性マジックペンの太さのものやロットリングの1.0mm等を使い、文字の横線部分のみを、定規を使って書きます。③最後に、縦線部分も定規を使い、その他はフリーハンドで描き、一字ずつ仕上げていきます。一文字の大きさが1×1cm以下の時は、ロットリングを使い分け、2×2cmまでぐらいの文字には、マジックインク 極細用、それ以上の時はマジックインク細書き用と、字の大きさに合うものを使い分けします。タイトルのような大文字は、定規を使い極細用マジックでふちどりを先に描きます。そのあと毛筆でぬりつぶして仕上げます。

左の写真の事例は、タイトル文字5×5cm、解説文の文字2×2cm、パネルの大きさ60×90cmです。

最後に、消ゴムで鉛筆の線を消し去れば、完成です。一度手がけてみてください。

### ツンドラと日本の高山植物



アルタイ山ツンドラのサヤギン 岐阜県高尾山ツンドラ、日本列島の高山植物の高山帯

本植物の世界です。この高山植物の中には、ツンドラの植物と形態がよく似ており、祖先を同じくするものが多くあります。かつての氷河時代に、北方から日本列島を南下し、暖かくなった現在、寒冷な山頂近くにとり残されたものです。

北極に近い寒帯には、永久凍土層があります。ツンドラといはい、低木をまじえた草本植物の世界です。一方飛騨山地の標高2500m以上の高地は、寒冷な気候のために、やはり小低木や草本植物の世界です。

# ヨーロッパ三ヶ国の博物館を見学して

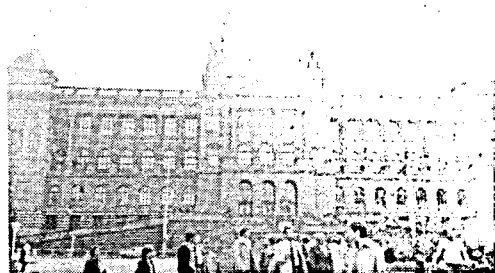
岐阜県博物館 学芸員 笠原 芳雄

昨年の秋昭和59年度岐阜県教職員海外研修派遣団の一員としてヨーロッパ三ヶ国（チェコスロバキア、オランダ、イギリス）の教育事情を視察する機会を得た。その中でいくつかの大小博物館を訪れることができた。限られた時間内での行動で、じっくり見たり聞いたりするほどの余裕はなかったが、かねて聞き及んでいたヨーロッパにおける博物館の伝統の一部をこの目でたしかめることができたと思う。ここではそれらの館で見聞したこと印象などを述べる。何か御参考になることがあれば幸いである。

## (1) チェコスロバキア国立博物館（プラハ市）

市中央の大通り（パツラフ広場）に面した場所にさん然と輝く壮大な総合博物館であった。特に自然史部門は展示室が広く、どのコーナーにもみごとな標本が分類展示されていた。とりわけ超特級の鉱物、大型動物（はく製）は圧巻で、大型の鉱物がケースなしで壁面の一部に置かれていた。古生物のコーナーを探すとなぜかここだけドアが閉じていた。廊下で職員に頼むと早速別室を通過して案内してくれた。ポヘミアという大産地をひかえて三葉虫はさすがに目を見はるものであった。この国の鉱物標本を入手したいものと売店へ立ち寄ったが印刷物や絵はがきのほか見あたらなかったため、学芸員の研究室を訪ねた。ホールと各展示室の間に岩石学の部屋があり、担当は年配の女性であった。名刺を出して来意を告げると親切に販売店の住所

〔国立博物館（プラハ）〕



電話を書いてくれた。また地質図は館にないからといって地形学図をゆずってもらうことができた。

## (2) オランダ国立美術館（アムステルダム市）

これも市中央に位置する大規模館であった。雨天なのに開館前の入口には行列ができていた。有名なレンブラントの絵を中心にした実物がずらり、それにケースも柵もない。見る者のマナーをふまえて、これ以上のサービスはなからう。関連した図録や写真など豊富で日本語版もある売店は入館者であふれていた。

## (3) アムステルダム市歴史博物館

繁華街の一角にある中規模館で受付では必要に応じて部厚い解説案内帳を貸し出すシステム、中庭をはさむ三棟をまわりでこの町の歴史をたどれるよう展示コースができていた。近世のコーナーでは1対1で解説に熱が入っていた。歴史画の前では中学生のグループがレポート用紙の記録に余念がない、授業中とのこと。

## (4) デフェンダー市博物館

オランダの訪問地の1つは丁度関市ぐらいの地方都市デフェンダー。古い城下町で、その観光コースの出発点になっているのが12世紀の計量検定所の建物をそのまま利用したこの町の博物館であった。古めかしいドアがしまっていて呼び鈴を押すとあけてくれた。この町の歴史を語る実物が整然と配列してあった。小規模館とはいえ受付横にはオランダの博物館に関する情

（歴史画をレポートする中学生）

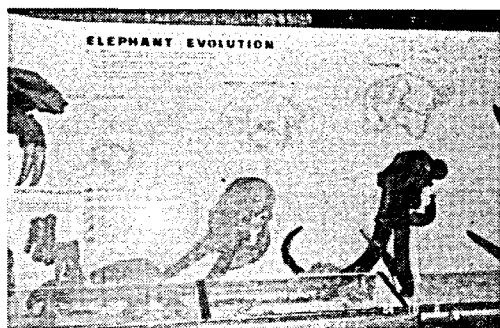


報を含めて各種案内書、解説書などが多くあって、さすがに博物館の国と実感した。この観光コースの中にもう一つ宇宙博物館があった。小さい教会だったというレンガ建ての内部にはすべて縮小模型によってロケットの歴史と月から惑星探査まで詳細に展示してあった。個人経営とのこと。印刷物なども含めて宇宙マニアの熱意が感じられる小博物館であった。

#### (5) 大英自然史博物館（ロンドン）

ヒースロー空港からホテルへ向かったバスが市内へ入ってほどなく古い大きい建物の前を通った。ガイドが「有名な自然史博で…」と告げたので何とか行きたいものと思った。その機会

#### （象の進化コーナー）



は2日後で、地下鉄駅を駆けあがってたずねた。玄関を入ったホールにはプロントサウルス（雷竜）の骨格復原がありこの周囲が各展示コーナーの入口になっていた。2階の哺乳動物の前では何人かがすわってデッサンをしていたのは日本でみかけない状況、植物コーナーの入口には種名の索引板があり標本さがしに便利ようになっていた。すべて実物中心で解説文はごく少ない。鉱物のコーナーは「鉱物とは何か、その特徴は」などの標本ケースごとに見ながら理解するといった工夫がなされていた。また化石については世界の地域の各時代ごとのコーナーで進化の様子を示すといったものがめだつた。売店は大きく左館の通路に沿って図書、標本（鉱物、貝など）などが並び、別に解説案内書やワークブックコーナーをそろえていた。鉱物2個を購入したが化石がみあたらない。この国の化石をほしいものと思って古生物学部の部屋をノ

ックした。奥まった所にあり、アシスタントが控え室へ入れてくれたので来意をつけるとしばらくして貝化石の専門モリス博士という若手が親切に対応してくれた。そして筆石とフズリナを交換することができた。聞けば古生物学部だけでキュレーターは25名ということで、展示のスケールが大きいこともうなずけた。

#### (7) 国立地質博物館（ロンドン）

自然史博の右隣り裏手に接してある、日本であれば筑波の地質標本館にあたるところで、こ

#### （地質博物館）



こには新しい展示「地球の物語」があると聞いていたので、是非と思っていた所である。

入口横の売店で地質図一枚と解説案内書を購入して中へ入るとまず

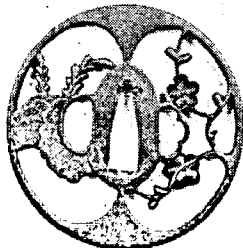
目についたのは日本産の輝安鉱の美晶であった。鉱物は種類別にびっしり、宝石コーナーをすぎると新展示の入口で、これはスコットランドの結晶片岩の露頭そのままの質の良いレプリカであった。なるほど模型や映像、ポラビジョンなどを駆使して地球の諸性質、内部構造から地表に働く作用などをわかりやすく示している。噴火の仕組みなどもうまく表現していた。ここを出た付近では中学生のグループがレポート用紙を手にして変成岩を観察記録していた。別のコーナーからは小学生の一群が出てきた。月曜日午後なのにと盛況におどろきつつ館を出た。

以上のように各館ともそれぞれ規模に応じて質の良い多量の実物を中心にした展示がみられ、自然史部門では分類展示が主流であることなどは予想された通りであった。また各館での利用の実態を見るにつけても彼我の歴史の差を感じると共に、今後の努力目標をつかんだ思いであった。

県博物館にビデオコーナー新設

ビデオで、自然や歴史を学ぶことができる「ビデオ・スタディコーナー」が、郷土学習室内に新設されました。同コーナーは、6つのブースに分かれ、総合、歴史、民俗、地学、動物、植物のジャンル別に5～15分の番組が、選択して見られるようになっています。1つのブースで3～4人が一緒に画面を見ることができ、家族連れや小グループで楽しみながら勉強できるようになっています。収録ビデオ内容には、縄文のうつわ、美濃焼、炭焼きの里、化石と地層、ヤマネ、野ウサギなどがあります。

県博・資料紹介  
「刀装具」展へどうぞ



- 梅に桐透鐔
- ・鉄地、丸形
  - ・無銘
  - ・桃山期
  - ・京透し

刀装具とは、腰刀、打刀の拵え(こしらえ)に用いられた鐔(つば)、小柄(こづか)、目貫(めぬき)、縁頭(ふちがしら)などの金具のことです。これらの金具には、透しや彫刻や象嵌(地金に他の金属を嵌め込んで装飾すること)などの技法を駆使したすばらしい文様や絵が施されています。その工作の入念さには驚きさえ感ずるほどです。今回は、江戸期までの資料を約200点展示します。

中津川市在住の鐔師、成木一彦氏は、全国各地の砂鉄を採集し、それらを原料に鐔づくりを試みられ、その貴重な資料を当館に寄贈いただきました。今回、これも合わせて展示します。

ぜひ皆様おでかけいただき、日本の伝統美の

再発見をしていただきたいと思います。

- 会期 12月16日～2月3日
- 会場 岐阜県博物館 特別展示室
- 入館料 一般150円 高大学生100円  
小中学生50円(通常入館料のまま)
- お問合わせは岐阜県博物館教育普及係へ  
TEL 05752 (8) 3111

岐阜県の博物館(要覧)出版準備終了

かねてより、会員館園の皆様が執筆依頼をし編集委員会で整理編集してきましたが、ようやく原稿が出揃いましたので、印刷にかかれることになりました。従来のもとは内容も一新され、一館園を見開き2ページで紹介していますので、より充実したものとなります。今春には会員の皆様へおとどけできると思います。

編集後記

◎青木理事長からの呼びかけ、博物館の発展充実のために、ぜひとも実現させたいものです。博物館の発展は、その中心である「博物館人」が自己研修に務めることですから。

◎博物館の理論と実践について、肩のこらない気楽な学習会を……。理事長の提案のみに終わらせることなく、仲間集団づくりにとりくみたいものです。会員各位からのご意見、提言等をお待ちしています。

◎その意味から、本号では、博物館展示における自作パネルについての実践例を紹介しました。少ない予算の中で、効果的な展示のあり方を今後も求めていかななくてはならない面での問題点は残りますが、学芸員として技術的な研修会も開催していく必要があります。

◎本誌の発刊が遅れ遅れですが、要覧も一段落しました。年度末までには遅れをとり返します。原稿をお寄せ下さい。(S.A)